

## 養殖真円真珠の指輪―売り出されたのはいつか

天然真珠の指輪は明治時代後期から人気の宝石で、指輪などに用いられた(『日本の宝飾文化史』)。大正期になってもその人気は継続し、ダイヤモンドに次ぐ高い人気の宝石だった。

大正期―特に前期―の真珠の特徴といえば、天然真珠と、御木本幸吉が開発した半円真珠(生産は大正七年頃まで)、そしてこの頃、何人かによって開発が始まった養殖の真円真珠(コラム1-5)が用いられたということである。

では、養殖真円真珠はいつ頃から指輪などの装身具に用いられ、市場に出っていたのだろうか。その時期を久米武夫『寶石學』所収「近世日本寶玉史」では「真円真珠の養殖方法の完成は明治の末期頃であるが、これが市場に徐々に現はれ初めたのは大正七、八年頃である」とする。近年に刊行された『真珠産業史』<sup>19</sup>でもこの久米武夫の説を採用し、定説化している。

だが、実際はもう少し早い時期からいくつかの小売店は取り扱っていた。

大正三年(1914)には当時の大手宝飾店によってすでに売り出されている(図1-2-18)。この広告の上段4点が養殖真珠で、「十八金製最上養殖真珠入」と表記されている(ほかは天然真珠の表記)。この図が実寸に近いとするならば、天然真珠より少し大きめで値段は15円と天然のものときほど変わらない。

流行に敏感な三越でも大正三年末には「十八金製養殖真珠入」と明記して養殖真珠入り指輪を売っている(図1-2-19)。また、村松貴金属品店では、同年4月に「伊勢湾養殖真珠特賣」として、6円50銭という破格値で指輪やネクタイ・ピンを売り出している(図1-2-20)。

これらの広告を見ると、養殖真円真珠がある程度まとまって市場に出たのは大正七、八年(1918、19)頃かもしれないが、多少でも出始まったのは大正三年頃と考えてよさそうである(ただし真珠の生産者名などは不明)。

なお、大正期は真円真珠の養殖技術が各地に拡散し、各種の養殖真珠技術も革新を遂げ、真珠王国日本の基礎が固まってきた時期で

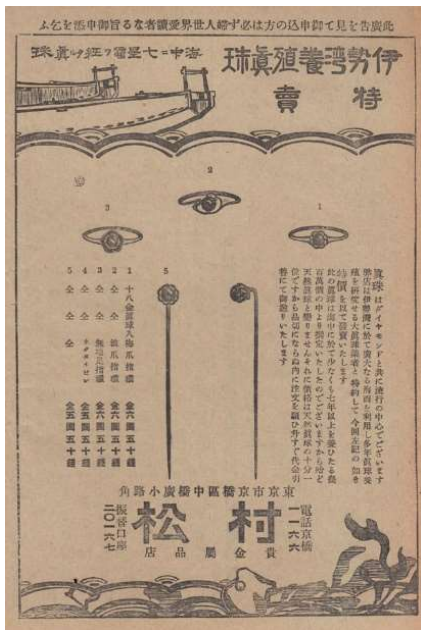


図 1-2-20  
養殖真珠入指環、ネクタイピン 広告  
村松貴金属品店  
大正 3 年 4 月 『婦人世界』



図 1-2-19  
養殖真珠入指環  
三越呉服店  
大正 3 年 11 月 『三  
越』 より

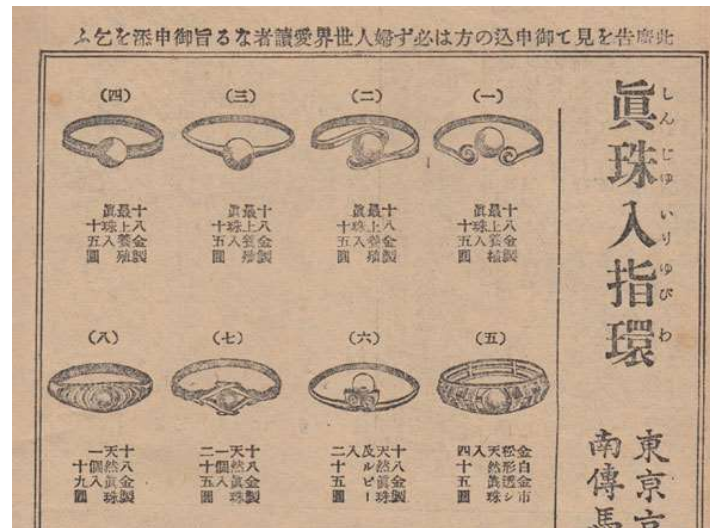


図 1-2-18  
養殖真珠入指環 広告  
大西白牡丹  
大正 3 年 4 月 『婦人世界』 より

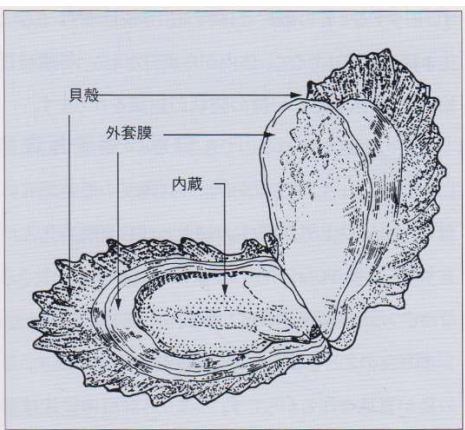
ある。それらについては 2 章大正後期で取り上げる。

(コラム 1-5)

### 真円真珠の発明者3人

御木本幸吉がアコヤ貝による半円真珠の養殖に成功したのは明治二十六年(二十七年(1893)頃、明治三十五年頃には真円真珠養殖の研究が始まり、長い間、神秘のベールに包まれていた真円真珠の成因究明と形成法が確立されていく。貝の外套膜がいつまぐの細胞の再生機能を使い、貝の体内に入れた核に真珠層を巻かせるという方法である。外套膜には不思議な性質があり、外套膜の一部が貝の体内に入ると成長し袋状の組織(真珠袋)を作る。この「真珠袋」が真珠作りのポイントになるという発見である。

そして、明治四十年から大正七年には真珠形成についての有力な特許が相次いで出願された。



アコヤ貝体内の概略模式図

『ジュエリーコーディネーター検定3級』⑩より

外套膜とは貝殻に密着し同時に内蔵全体を覆っている薄い膜。全体を覆っているので外套という言葉が使われている。

西川藤吉にしかわとうきち—今日の真円真珠養殖技術にもつながる「ピース式」(西川式ともいわれる)の発明者。特許出願は明治四十年(1907)10月。後世にかけがえのない大きな功績を残したが明治42年、若くして病死。その後、藤田昌世によって西川の技術は補完され、引き継がれ完成していく。そして現在に至るまで長く挿核技術の基本となっている。

「ピース式」とは、貝の外套膜の小片(ピース)を切り取り、ドブ貝の貝殻から作った核と共に貝の体内に移植

して「真珠袋」(真珠を作る一種の臓器)を形成させ真円真珠を得る技法。

みせたつへい

見瀬辰平―西川と同じく、真珠形成にとって「真珠袋」の役割を重視し、明治四十年3月、「注射針活用の技術」で特許を出願(明治三十八年へ1905)にも特許を出しているがその時は却下)。これが世界初の真円真珠だが、生成される真珠は、1年で1.5ミリ、2〜3年かけても大きくならず大正初期にはほとんど中止された。その後も研究を続け大正六年(1917)には「誘導式」と呼ばれる特許を申請したが大きな真珠は得られず、効率も良くなかった。

「注射針活用の技術」とは、特殊な注射器で外套膜の一部を切断し、そこに注射器の押針で直径0.5ミリの核(銀製の核)を押し出し、真珠貝の体内に入れる。やがてそこに真珠袋が形成され、真円真珠ができるというもの。

なお、見瀬は明治四十年5月にも「真珠人工形成法」の特許を申請したが、のちに西川藤吉の出願特許と内容が抵触するとして認められなかった。これに対して、見瀬は西川側に譲歩し争わなかった。

御木本幸吉―大正七年(1918)5月、御木本養殖場くわばらおつきぢりの桑原乙吉(元歯科医)によって発明された「全巻式」

(「全環式」「全冠式」とも書く)という真円真珠形成法の特許を御木本幸吉名義で出願。「全巻式」とは、真珠層を分泌する外套膜外面上皮細胞で核を包み込み、合わせ目を極細の糸で結んだものを貝体内に挿入して「真珠袋」を形成させ、真円真珠を得るというもの。大正七年には第1回採収が行われ、良好な結果を得て翌年八年にはロンドン市場にも売り出された。しかしこの方法は、作業が難しく、効率が悪かったため、実用性に欠けた。

以上、『御木本幸吉』<sup>21</sup>、『御木本真珠発明一〇〇年史』<sup>22</sup>、『真珠の発明者は誰か?』<sup>23</sup>などを参考に記した。

業界への貢献度と実用性という視点から見れば、西川藤吉が養殖真円真珠の発明者であり、御木本幸吉は発明者というよりは発明の貢献者、そしてなによりも養殖真珠を世界に広めた偉大な実業家。見瀬辰平は真珠史に残

る研究者だが、小粒真珠しか得ることができず事業家としても恵まれなかった人物―近年ではこうした見方をされることが多かった。

ところが最近、歴史研究者の山田篤美著『真珠の世界史』<sup>④</sup>が刊行され、これまでとは違う見解が出された。真円真珠の発明者としては影が薄かった見瀬辰平こそ、真の真円真珠の発明者とする説である。詳細は同書に譲るが、西川藤吉発明者説に異を唱え、「西川は真珠形成原理を解明したとはいえず、一九〇七年ごろにはアコヤの真円真珠は作れていなかった。(中略)一方、見瀬は小粒とはいえアコヤガイの真円真珠を作り出し、その後、大粒真珠実用化にも大きな足跡を残している。見瀬こそを真円真珠の発明者として顕彰すべきではないだろうか」と主張。真珠発明史の解明はまだまだ不十分であるということであろう。

真珠産業界では、明治四十年を「真円真珠発明の年」とし、ここで紹介した西川、御木本、見瀬の3人を真円真珠の発明者として顕彰している(昭和三十二年、「真円真珠発明者頌徳碑」)。

なお、御木本幸吉は明治四十年8月には「明治式(三八式)」と呼ばれる真円真珠に関する特許を出願している(翌年許可)。明治三十八年に発生した赤潮被害の時に、半円真珠養殖のために挿入した核が貝から離れ、偶然に核全体に真珠層を巻いた真珠が5個出たことをヒントにしたもの。これが真円真珠の発明にあたるかどうかは研究者によって見解が分かれているようだ。

### 図案及応用作品展―宝飾品出品され、宝飾デザイナーも登場

大正期は工芸品とその意匠図案(デザイン)の改善に国を挙げて取り組んだ時代である。この目的を達成するため、大正二年(19

13)から農商務省主催の「図案及応用作品展」<sup>および</sup>が農商務省商品陳列館において開催された。

この展覧会は輸出自工芸品の意匠図案の奨励を主眼としたものだったが、図案奨励策の全国的普及と図案家(デザイナー)の社会的確立にも大きな役割を果たした。

宝飾装身具業界からも、淵江寛(御木本)、内藤隆次(中村商店)

の二人の名前が出て、新時代の装身具を作るためには、専門のデザイナー（当時は**凶案家と呼ばれた**）の存在が不可欠であるということを、この時はじめて知らしめた（**コラム1-6**）。

「**展覧会図録**」によると、第1回展に御木本真珠店は、実作としてネックレスや宝石入簪、七宝帯留などを出品し、凶案として多数の帯留、ペンダント、束髪用簪、束髪用櫛を出品している。山崎亀吉（清水商店、尚工舎）も束髪簪、帯留を出品している。

第2回展（大正三年）には御木本真珠店の装身具凶案の他、中村商店からデザイナー内藤隆次が束髪櫛と束髪簪の凶案などを出品し（**図1-2-21**）、実作として社主の細沼浅四郎がペンダントや帯飾り用の真珠入短鎖を出品した。

第3回展には御木本のデザイナー淵江寛が宝石入りのティアラやネックレス、ペンダントの凶案を出品（**図1-2-22**）。また村松合資会社はダイヤ入り帯留やダイヤ入り短鎖<sup>たんぐざり</sup>を出品している。

第4回目以降は略すが、御木本真珠店などはその後も出品している。この展覧会には有力宝飾品製造業者がこぞって参加しているところを見ると宝飾品―特に洋風の―のデザイン向上に果たした役割はかなり大きかったと思われる。なお大正七年（1818）の第6回展からは展覧会名から「**凶案**」の文字が削除され「**工藝展**」となり凶案部門が縮小された。大正十二年（**1923**）からは主催が商工省となり昭和十四年（1939）まで継続した。

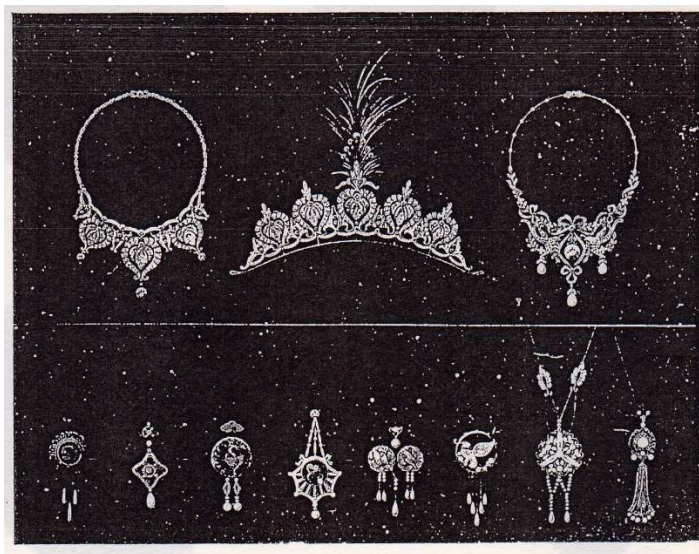


図 1-2-22  
淵江寛デザインのティアラとネックレス、ペンダント  
『農商務省第三回図案及応用作品展覧会図録』より

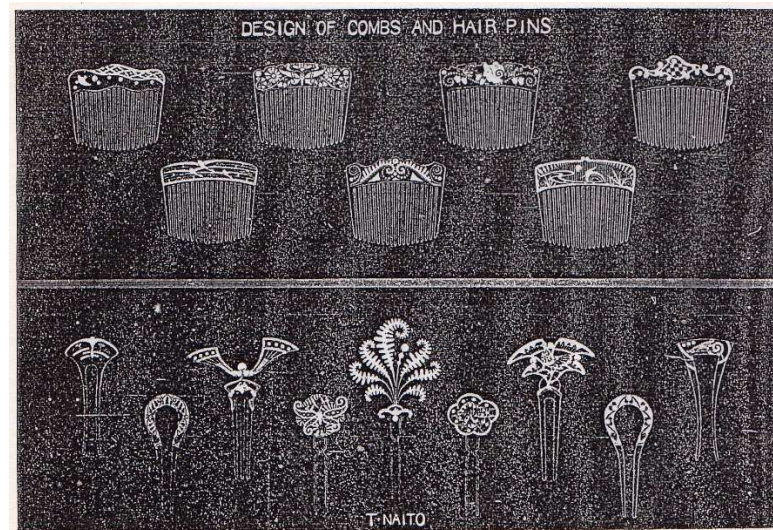


図 1-2-21  
内藤隆次デザインの束髪櫛と束髪簪  
『農商務省第二回図案及応用作品展覧会図録』より

淵江寛は御木本の最初のデザイナーである。御木本は明治四十年（1907）、業界に先駆けて凶案室を設けているが、その時最初に招かれたのが東京高等工業学校工業図案科出身で東京府立染織学校教員であった淵江寛。淵江は御木本の隆盛をデザイン面で支えた「ミキモトデザインの源流をになうデザイナー」として宝飾装身具史にその名を残している（『御木本真珠発明一〇〇年史』）。内藤隆次はこれまで全くといっていいほど知られていなかった忘れられた宝飾デザイナー。内藤も東京高等工業学校工業図案科出身で、卒業後は中村商店（後の細沼貴金属工業）に就職。凶案部に所属し「さまざまな展覧会に意匠作品を出品し、デザイン関連の専門誌に記事を投稿するなど、社内外において洋風装身具の水準向上に大きな役割を果たした」（大正期を代表する装身具製造業者）<sup>②5</sup>。

### 短鎖<sup>たんぐさり</sup>一帯のペンダント

短鎖という装身具については、初めて耳にするという人も多いのではないだろうか。

これは大正期に大流行した女性の帯に提げる懐中時計用帯飾りのことで、大正三年の第2回「凶案及応用作品展」にも出品されている。この頃にはすでに市販もされていて、銀座の白牡丹本店では早くも売り出している（図1-2-23）。図1-2-24はそれと同様の実物で、図1-2-25はその着用図である。

この装身具はどのようなに生まれたのだろうか。着想は西洋のペンダントにあつたようで、村松貴金属品店通販カタログ（大正十年『新報』No.39）には「ペンダント応用の短鎖―欧米婦人が装飾品の生命として全力を傾注して意匠した多種多様なペンタント（胸飾）の粹を蒐めて換骨奪胎したもの」とある。「ペンダント」を「ペンタント」と表記しているところには時代を感じるが、ペンダントから着想し和装に取り入れたところに大正という時代の意気込みを感じる。

短鎖は大流行し、懐中時計に代わって腕時計が全盛になった昭和初期になつても愛用者は多かったといわれる。

なお短鎖のヒントについては異説もあり、業界記録『宝石百年』では、短鎖は「根付とその緒からヒントを得たもの」だとしている。

新様式の装身具①—カリブル形  
 大正前期の初め頃には、ヨーロッパで流行していたカリブルというカットの宝石を使ったカリブル形の装身具が流行した。

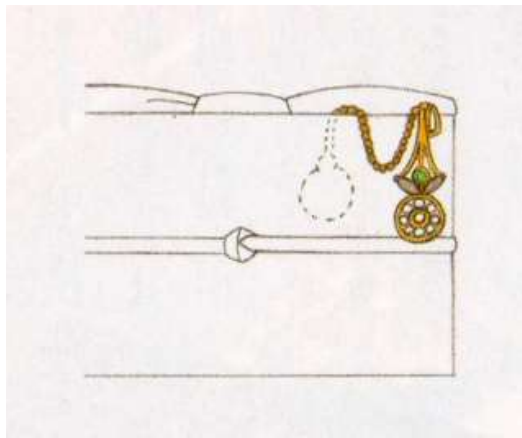


図 1-2-25

短鎖着用図

『和装小物のお洒落』<sup>26</sup>より



図 1-2-24

K18 オパール、真珠入り短鎖



図 1-2-23

短鎖広告

白牡丹本店

大正 3 年 8 月 『演芸倶楽部』



図 1-2-26

カリブル留め指輪 広告

大西錦綾堂

大正 3 年 6 月 『婦人世界』 広告より

カリブル (カレブルともいう) とは方形の小さな角形カットの色石 (エメラルド、サファイヤ、ルビーなど) ルビー、サファイヤは合成石も含む) のこと。この形の宝石を隙間なく並べてレール留にすることをカリブル留めという (『ミキモト / 真珠王とその宝石店 100 年』)。

カリブル留めの工法を使った指輪は大正三年に、大西錦綾堂が売り出している (図 1-2-26)。

御木本真珠店でも早くから取り組んでいて、カタログ『真珠』ではカリブル留めの指輪を多数紹介している (図 1-2-27)。

細工が繊細なので高度な技術を要するが、大正後期の装身具や昭和初期のオール・デコ様式の装身具にもカリブル留めがしばしば使われている。

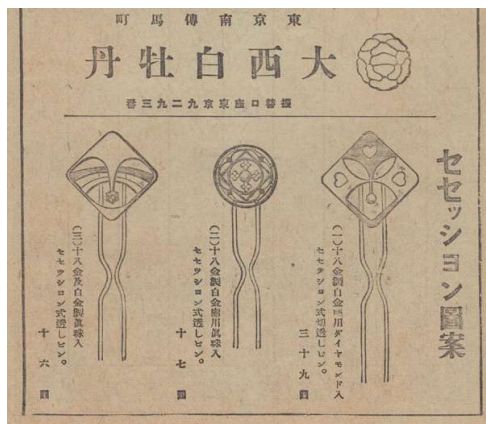


図1-2-28

セセッション様式の束髪簪 広告  
大西白牡丹  
大正2年9月『婦人世界』広告より

新様式の装身具②—セセッション様式

また、セセッション（「ゼツェシオン」ともいう）式と呼ばれる新しい様式（表現形態）の装身具も御木本真珠店や大西白牡丹から売りに出されている。

セセッションとは、ウイーンに飛び火したアール・ヌーヴオーがユーゲント・シュテールとして発展し、後にアール・デコへとつながる母体となる美術様式。

このデザインは比較的シンプルな直線的構成に特徴があり、大正前期の指輪や短鎖、束髪簪にも応用された（図1-2-28）。

現在から見るとそれほど斬新とも思えないが、当時としては新しさを感じたのだろう。

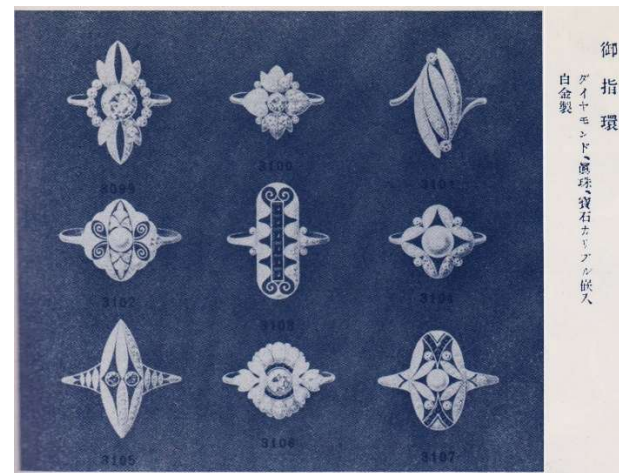


図1-2-27

御木本真珠店のカリブル留めの指輪  
『MIKIMOTO SINCE 1893』(27)より

### 新様式の装身具③―バルカン式意匠

この頃、御木本真珠店では、バルカン式意匠によるネックレスを作っている(図1-2-29)。あとで説明するが、ネックレスが一般に普及するのは関東大震災以降だから、これは初期のネックレス作例といつてよい。

ところで、あまり聞いたことのないバルカン式とはどんなデザイン様式なのか。

ミキモト関係の資料によると当時アメリカで流行していたデザインで、バルカンとは蝶の一種のことで、羽を抽象的に表現したデザインを指すようだ(『MIKIMOTO SINCE 1893』)。ヨーロッパのみならず、アメリカの最新デザインまで取り入れようとしているところが、デザイン開発に積極的な御木本らしい。

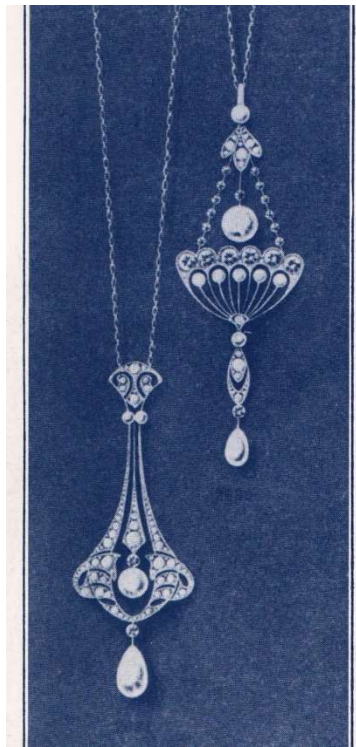


図 1-2-29

御木本のバルカン式ネックレス  
『MIKIMOTO SINCE  
1893』より  
日本趣味も加味された優雅なデ  
ザイン。